

薔薇の十字架

ロザリオ

薔薇の目醒め

じりり、と蝋燭が音をたてた。ほの明るい部屋の、小さなベッドの上で少年が穏やかに寝息を立てている。僕は彼のその頬にそっと手を滑らせた。滑らかな白い肌。絹糸のような淡い金の髪、小さな唇。何もかもが愛しいその少年は、もう三日ほど目を覚まさない。「パトリス……」

彼の名を囁いてみると、ぴくりと眉が動いた。僕はハッとして、思わず彼の顔を覗き込む。んん、と唇から小さな唸り声が漏れた。

「パトリス？ パトリス……」

彼の名を呼び、その肩をそっと揺らしてみる。もぞもぞと彼は身体を動かし、眉をひそめて、んん、とまた小さく唸り声を漏らした。そして、

「……………ん、」

その瞳を開いた。薄水色の丸くて愛らしい瞳だ。僕を真っ直ぐに見つめた、あの瞳！僕は嬉しくて思わず彼を抱きしめそうになったけれど、なんとかその衝動を抑えてそっと微笑みかけてみせる。

「おはよう。」

「……………」

彼はまだぼんやりとしているようだった。暫く虚空を見つめて、微かに息をする。けれどやがて首を気だるげに動かし、僕の方を見た。

「……………オルト、ヴィーン……………?」

「ああ、良かった。僕の事が分かるんだね。」

彼……………パトリス・ベルリオーズが目を覚ました。そして僕の名を呼んだ。それだけで、僕の胸の中は幸福で満ち溢れる。

「ここは……………」

「ここは、まあ、僕たちの別荘みたいな場所だよ。ああ、まだ起き上がらないで、身体が辛いだろう。」

あたりを見渡すためか身体を起こした彼をそっと制する。彼は言われるがままにもう一度ベッドに身を倒した。気だるげな表情をしているが、顔色は其処まで悪くない。目にもすっかり光が宿っている。

「何があったか覚えているかい？」

「……………ん……………えーと……………」

パトリスは暫く考えて、そしてゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ああ……………そうだ……………僕は……………君に……………助けてって……………」

「そうだよ。そして眠りについた。良かった、記憶もすっかりしているようだね。」

「僕は……………もう、……………人間じゃないってこと……………?」

思った以上に理解が早い。こんなにあっさりとしてを受け入れる人間——正確には、「元」人間か——はそういない。パトリスは賢い子なのだろうと思う。

「そうだね。……………僕がそうした。ふふ……………なかなか目覚めなかったから不安だったんだ。」

「オルトヴィーンも不安になる事、あるんだ……………」

「あるさ。偶にね、僕たちの血が身体に合わなくてそのまま死んでしまう人間もいる。あと、目覚めても、錯乱して暴れまわったり、勝手に逃げ出したり……………そういう者たちもたくさんいる。でも君は思った以上に冷静に、全てを受け入れた。僕はそれがとても嬉しいよ。」

「……………だって、僕が望んだこと、だから……………」

「そうだね。でも、後悔する可能性のほうが高いと僕は見ていたよ。」

「……………母様は？」

「……………」

尋ねられて、何と答えるべきか迷う。彼の許嫁だった少女には、「あなたに任せます」と言われた。——彼の母親は死んだ。それを伝えて良いものだろうか。彼が何よりも大事にしていたのは、その母親だったのだ。

「……………いや、やっぱり……………いいや。もう僕には、関係のない……………こと……………だものね。」

「……………そう、だね。」

彼はもしかしたら、僕の様子から察してしまったのかもしれない。少しだけ申し訳ないな、と思う。どうせなら隠せばよかった。……………僕らしくない。こういうとき、何もかも取り繕って隠し通すのは得意なほうなんだけれど。パトリスのことになると、どうしてもいつも通りでいられなくなる。

「……………唇が渴いているね。喉も渴いてるんじゃないかな。」

話題を変えようと、そつと彼の唇に指を押しあてた。たいてい、目覚めてすぐは喉が渴いている。それは耐えがたい「渴き」だ。すぐに、欲しくなる。何がって、もちろん——血が。

「……そう、いえば……声も、出しにくい……喉が……はりついて……」

「そうだろう。じゃあほら、お飲みよ。」

そう言つて、僕は彼に首筋を差し出す。彼は流石に驚いたように目を見開いた。

「えっ…… どういう、こと？」

「飲むんだよ。僕の血を、ね。そうすればその渴きは癒える。……僕たちがどういう生き物なのか、もう君は分かっているだろう？」

「……………」

彼は困つたように眉を人の字に曲げた。そんな様子がとても愛らしい。嗚呼、なんて可愛い子なんだろう。本当に愛しい、僕の薔薇。

「飲まないよ、死んでしまうんだよ。」

「……………」

「そうだよ。これから、永遠に。」

「永遠に……………」

「怖い？」

「怖い、というか……………」

ひどく戸惑っているのが見えているだけで分かる。たいていそうだ。まあ、血を飲むなんて、躊躇つて当然だと思う。僕もはじめてのときはとてもじゃないけれどできないと思つた。逃げ出そうとだつてした。すぐに捕まえられたし、飢えに耐えきれなくなつてしまつたけれど。

「ど、どうしたら、良いの…………？」

彼はどうやら腹を決めたらしい。パトリスは思つた以上に勇敢なのかもしれない。

「ふふ、……僕の首に、齒をたててごらんよ……感覚で分かるさ、君ならきつとね。」

恐る恐る、パトリスが身を少しだけ起こして僕の首筋に唇をよせる。それから、齒の冷たさを感じた。僕は思わずパトリスを抱きしめる。以前とは違う、冷えた身体。でも、確かにパトリスの存在を感じられる。嗚呼、なんて愛しい——

暫くの間、彼は僕の首筋に噛みついて、僕は彼を抱いていた。僕は人に血を与えることはあるけれど、あげることはめつたにない。愛しい「妹」、アンネローゼ

だけは別だけれど。血を与える時の感覚はなんともいえないものがある。頭の芯が痺れて、どことなく甘い感覚がある。そして僕の血を得た相手への愛が深く深くなつていく。

「……ふふ、たくさん、飲んでいいよ。僕の血はどうやら濃いやうだから。」

「……………」

まるで赤子が母の乳を飲むように。パトリスは暫くの間、必死に僕の血を求めていた。身体中が甘い痺れに支配されていくのが分かる。

ようやく、パトリスが唇を離れた。その頬は少し赤らんでいて、そしてすぐに目を逸らしてしまう。

「……どうして目を逸らすの？」

「い、いや……なんか、恥ずかしくなつて……………」

「ふふ、恥ずかしがらなくても良いのに。……本当に可愛い薔薇だ。」

僕は、しつとりと湿つたその唇に僕のそれを落としたり。パトリスは一瞬びくりと肩を震わせたけれど、抵抗はしないで、むしろ、僕の背に腕を廻してきた。

甘い口づけだつたと思う。僕は先ほどから身体を支配する痺れに耐えきれなくなつていた。だからつい、彼をベッドに押し倒してしまふ。

「あつ……………」

「パトリス。」

彼の首筋にそつと唇を寄せる。決して血をもらうためじゃない。

「あ、……オルト、ヴィーン……………」

「僕の愛しい、薔薇……………」

脳すら支配する痺れに、僕の理性はもはや存在していなかった。まるで飢えた獣だ、と自嘲する。するりと手で身体をなぞれば、小さく、あ、とパトリスが声をあげる。

「ま、つて……アンネは……………」

「アンネは今、外に出てる……暫くかかると思う……だから大丈夫。」

そう言つて笑うと、パトリスは頬を赤らめて、もう、と小さく呟いてから僕に思い切り抱き付いた。

**

じりり、と蝋燭が音をたてた。ほの明るい部屋の、小さなベッドの上で少年が穏やかに寝息をたててい

る。少し汗ばんだその身体を、顔を、そして髪を優しく撫でて、もう一度口づけを落とすと、僕は彼にしっかりとシーツをかけてやっってからベッドから立ち上がった。恐らく、もうじきアンネが帰ってくるだろう。そんな気がしたので。彼女に関する僕の勘はよく当たる。何百年という時を共に過ごしてきたのだから。

彼を起こさないように静かに部屋を出て、階下へ行くと、僕は薔薇の紅茶を淹れた。……この紅茶の淹れ方を教えてくれた女性は、もうこの世界に存在しないととても美しく優しいひとだった。

紅茶を淹れ終えて、いつも通りソファに腰掛ける。紅茶を一口飲むと、身体に薔薇の香りが広まっていく。それにしても、先ほどは流石にがつつきすぎただろうか。目覚めたばかりの彼にずいぶんなことをしてしまった、と流石に反省する。でも彼だつて受け入れてはくれたし……なんて。僕はやっぱり、パトリスのことになるといつも通りではいられなくなる。それほどまでに彼に惹かれた理由は何だろう。アンネローゼはよくこういう。「兄さまは、可哀想な子が大好きなのよ。可哀想だと好きになっちゃうの。」と。……そうなのかもしれない。

パトリスとアンネローゼはひどく似ている。この二人のことになると、僕の心はいつだって乱される。

ぎぎ、と音がして、アンネローゼが帰ってきたのが分かった。

「ただいま、兄さま。」

そう言って微笑んだ彼女は、思わず悲鳴をあげそうになるほどに血に塗れていた。

愛しい薔薇たちは、やっぱり僕の心を色々な意味で乱してくれる。

To Be Continued...